



文化庁

Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan

メディア芸術連携促進事業  
連携共同事業

佐藤秀樹第1回インタビュー前半：  
幼少期の暮らし

清水 洋  
金 東勲  
嶋原 盛之  
山口 翔太郎

IIR Working Paper WP#18-16

2018年2月

Hideki Satoh, Oral History (1st, 1):  
The Life in Childhood

Shimizu, Hiroshi  
Kim, Donghoon  
Shigihara, Morihiro  
Yamaguchi, Shotaro



RCGS  
立命館大学ゲーム研究センター  
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University  
Institute of Innovation Research



ゲーム産業生成における  
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業  
EMERGENCE of Industry,  
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry



佐藤秀樹第1回インタビュー前半：幼少期の暮らし

清水 洋  
金 東勲  
鳴原 盛之  
山口 翔太郎

Hideki Satoh, Oral History (1st, 1): The Life in Childhood

Shimizu, Hiroshi  
Kim, Donghoon  
Shigihara, Morihiro  
Yamaguchi, Shotaro

## 目次

<u>生い立ち：引っ越しを繰り返す</u>	<u>3</u>
<u>幼少期：遊び・勉強・家庭環境</u>	<u>6</u>
<u>幼少期：性格</u>	<u>12</u>
<u>幼少期：外での遊び</u>	<u>13</u>
<u>幼少期：おもちゃ</u>	<u>16</u>
<u>幼少期：両親からの小遣い</u>	<u>19</u>

## 生い立ち：引っ越しを繰り返す

Q：それでは、よろしく申し上げます。本日は、時間的な流れでいくと、恐らく1971年に入社されるか、入社されて少しぐらいまでのところぐらいまでをお聞きできればというふうに思っております。最初にご確認させていただきたいのは、1950年に北海道でお生まれになられると。ちょっと子どもの頃からを振り返っていただきたいんですけども、ちなみに北海道のどちらでしょうか。

佐藤：北海道の芦別という炭鉱町です、当時は。そこで生まれまして。それで私の下には4歳違いで妹。さらに2歳違いで弟、両親との5人家族ということです。私が長男っていうことで。後で聞きたいんですけど、何で秀樹って付けたんだっつたら、何か湯川秀樹がノーベル賞取ったんで、じゃあ名前にあやかろうと。まあ考えるのめんどくさかったんじゃないですか、おやじは(笑)。で、私が秀樹で、めんどくさいの証左が、妹が好子。まあ好き子だね。で、弟が、まあ私が秀樹ですから、じゃあナオキにしようみたいな、何かまあ(笑)、かなりいい加減な形で名前を付けられたんじゃないかなという気がしますけど。両親とも亡くなってますから、その辺のあれは聞く暇がないのね。ちょっと死んじゃったんで。どうして付けたか私は知りませんけど。

それで、北海道の芦別っていう所で生まれて、それからかなり転々としてるんです。とはいえ空知郡の中。空知郡って郡があるんですけども。まあ良くも悪くも父ってのはちょっと変わってて。よく言えばほんとアメリカナイズドされて、能力・スキルを認めてくれたんだったらそちらに、まあスキルアップっていう形で移動するというような何か考え方っていうのかな。それがあって。それが故に、芦別で生まれまして、それでその後は野花南(のかなん)。富良野の近くですけども、富良野市字野花南とかね。

Q：「のかなん」というのは地名ですか？

佐藤：野花南っていうのは、野原の野に、花かな、うん。で、南で野花南。野花南で確か小学校入学だったというふうに記憶してます。野花南から、その後は島ノ下(しまのした)、うん、行って。で、歌志内という、これも炭鉱町だったと思います。歌志内へ行って、それからまた芦別へ戻ってとか、何かいろいろ転々とししました。

Q：それはお父さまの仕事の都合で？

佐藤：そうです。父は製材所でのこ、のこつつつても製材所で使うのこですから、すっごい大きなのこ。で、丸のこもあれば、帯のこつつつて、そうですね、30センチぐらいでこちらに歯が付いてて。で、そのこの目立て。要はこのこは使っていると切れなくなってくる

んで、それを研ぐというんですか、そういった仕事をやっていたんです。ですから製材所関係の周りを転々として、そのたびに引っ越しをしてたということです。

それで当時は交通というと自動車しかない、ということです、通勤という概念はあんまりないんです、なかったんです。今でしたら車があって、じゃあ父が、まあ島ノ下から例えば歌志内に行きます。車で例えば30分です。よしんば1時間ですつつつても、まあ車でじゃあ通うみたいなそういうことができるかも分かんないですけど、当時は車自体がやっぱり三種の神器、3Cといわれたぐらい、まあとてもじゃない、われわれの手に入るようなもんじゃない。

そうするともう引っ越しです。で、引っ越し、引っ越し、引っ越し。えらい年だと、ほんと1年半ごとに何か引っ越しすんですよ。それで、よく言えばスキルアップで請われてそこへ行くんですけど、性格的にちょっと変わってるとこあって、なかなか反りが合わないっちゃうかな。そのときリクルートする立場からいくと、ぜひとも来てください、あなたが頼みですみたいなことを言うんだけど、行って実際仕事一緒にする、もしくはその経営者からしてみると、させてみた、そうするとちょっと使いにくいっていうことになると、だんだん反りが合わなくなってくる。で、そんなとこにまた1年、1年半、2年ぐらいすると、また他から。それなりに腕は良かったみたいですけどね。それでまた呼ばれて行く。そうすると、学校へ入ってまあ1年もしたらまた転校ですよ。ほれでやっとなら慣れてきたかなと思ったらまた転校、転校。私は転校つつう立場を何回もやってるんです。

転校するとあれは、まあ皆さん転校のご経験あるかどうか分かんないんですけど、最初はやっぱり嫌なもんだよ。誰も知らない(笑)、ところにぼんっと行って。それで自己紹介を含めて、佐藤秀樹です、どうたらこうたら、趣味何ですみたいなことをしゃべって。んで最初のうちはやっぱり独りだもんね、誰も友達がいない。そうすつと、中にはやっぱりちょっとおちゃらけたやつだとかいて、それなりにこう話し掛けてくれて、そっから少しずつ少しずつやっつこう友達関係、人間関係ができてくるわと。っていうことですけど、最初のやっぱ数カ月、やっぱり非常に寂しい思いをしますよね。

あるとき何かもう転校嫌だと言って。ほしたら、じゃああと、テレビ買ったからと言って、それでころっと。当時はやっぱテレビというのは、まあ皆さんほんとにご存じないでしょうけど、テレビのあるうちっていうのはもう、やっぱり金持ち。もしくは店やりますとか、そういった所へ見に行くわけだよね。それは何も私だけじゃなくて、やっぱ周りに何人もいて。特にある商店やっていた所なんてのは、まあほんと夜の5時、6時ぐらいからガキタレがこっちに来てテレビ見せてもらって、それで帰ってくるみたいな。そういうのが、自分ちにテレビがあれば、もちろん白黒ですよ、あれば見放題だなんて。だからまあ私を黙らせる、懐柔するのに、ね、テレビ買ってやるから、みたいな。あれにころんといつて、じゃあいいよって。だけどやっぱり学校入ると最初からすぐに友達なんかいるわけがないので、寂しい思いをしなきゃなって。で、徐々に、徐々に慣れてきました。慣れてきた頃にまた転校という。

そこで、あるときなんか、さっき言いましたけど、もう涙ながらにさよならつつて。ちょうどあれ小学校のもう 5 年生ぐらいかな。芦別って所からあれ、歌志内だったかどうか忘れましたが、そこへ引越ししました。そしたら、またおやじが、今度また芦別の違う製材所で、こう、まあ製材所からリクルートされて。そこへ移ります。で、引っ越し。それで小学校の 5 年生ぐらいのときに、涙ながらにさよなら、さよならちゅって。

ほれが、今度中学校の 1 年生かな、ぐらいのときにまた戻る。そうすると、まあ大体近い場所だったんで、当時のその小学校のときの友人といいますか、クラスメイトがやっぱり同じ中学校へこう来ていて、ほいで中学校 1 年生、転入、まあ転校生ということで。はい、佐藤秀樹ですって言う、話すと、まあ何人か知った顔がいるんだよね。それはそれである意味心強いんだけど、かっこ悪いよね。かっこ悪い。あの別れが何だったんだ、みたいな。

一同：(笑)

佐藤：あの涙は何だったんだ、みたいな。ほいで中学校へ戻って。それで、やっぱり製材所そのものというのが、やっぱり外材って、何ていうんですかね、海外からの材木が入ってくるようになってっていうことで。北海道の地場にある製材所っていうの、やっぱりどんどん、まあ斜陽産業ですね、なってきた。ほいでその、父が勤めていた製材所もやっぱりもう閉鎖すると、せざるを得ないということになって。ほいで父は、じゃあ東京へ出てそれで、東京には木場があったんで、木場へ勤めたいっていうことで東京へ出てきたの。そのときは単身でこっちへ、東京へ出てきて。

それで木場へ行きましたと。まあ父から聞いた話ですけど。木場へ行って、いや、実は自分は長年のこの目立て、これをずっとやってきて、だから自信ありますみたいなこと言ったんだけど、もう当時からやはりのこの目立てそのものって一種の技能ということで、技能士という一種の免状つつうんですか、国家資格。だから木場ぐらいになるとその資格を持った人間じゃないともう雇わんということになって。まあこっちに、東京に出てきたはいけど、その自分が今までやってきたこと全然できない、いうことで。

ほいでまあいろいろ、まあどういう苦労したのか分かんないんですけども、当時プリンス自動車という自動車会社があって。それは日産が吸収合併したんですけども。で、いつとき日産プリンスみたいな。で、プリンス自動車があって、そこで一種の季節工として雇われて。ある季節の間雇って、それである季節が過ぎたらそれで解雇みたいな。そういう、まあテンポラリー職員ですね、あれになったんですけど、のこの目立てやるにしろ何にしろ、一種まあそれなりの技術を持ってたことが評価されて、それでプリンスの社員として迎えられた、いうことで。

父がこっちへ来てる間は、母と兄弟、これが北海道にいて、それで父からの仕送りでもまあ何とか食ってた、いうことですけど、こちらで一種定職が見つかったっていうことで、じゃあおまえら出てこいというので、中学校の確か 1 年ぐらいですけども東京へ出てきた

んです。

Q：1963年ぐらいですか。

佐藤：63年ぐらいです。だからオリンピックのちょい前かな。4年かも分かんない。それで中学校の1年生ぐらいのときには、まあそれなりの成績だったんじゃないかな。

Q：ちなみに東京のどちらに。

佐藤：八王子。八王子の七中、第七中学校という所に入学したと。それは何でかという、父が、その勤めてたのが、武蔵村山に日産プリンスの工場があつて。おっきな工場です。今は全部なくなって、まああれですね、何かショッピングモール街つていうかな、それになってるようですけど。

Q：それって、今はイオンとかがあるところですかね。

佐藤：ああ、そうですね。そこに社員として勤めるに当たって、近場でその住居つていうことですけど、そんなに金があるわけじゃないので、今もあるかどうか分かんないですけど、雇用促進事業団つていう公の何か、雇用促進するためにみたいな、そこが運営する団地が八王子にあったんです。八王子のあそこ、小比企町というね。小比企は、小さいに比較の比にそれから企画の企、小比企、小比企町という。で、すぐそばに火葬場があつたよね。まあ後で、冗談ですけど、死んだらあそこへ俺引きずってくから大丈夫だよつていう（笑）。小比企町にその団地があつて、その団地に住めることなつたということで。一族郎党、おやじは先に住んで、それで母と兄弟3人で移り住んだ。まあ今考えると、ちっちゃなあれだつたね、団地だつたね。間取りからいって2Kかな。6畳、3畳、キッチン。キッチンつたつて、あれ、2畳ぐらいだろうな。そこに一家5人。

### 幼少期：遊び・勉強・家庭環境

Q：その中学校の前になると、小学校のときのお話なんですけども、例えば遊ぶときとか、友人と、どういう遊びをされていたんですか。

佐藤：記憶してるのはビー玉、それからこちらではメンコという、メンコといますけど、向こうではパッチつていってたんですけど、この印刷された丸いその厚紙。これを盤上でペッ、うわっ、投げて、落としたりもらえるみたいな、だからメンコです。もしくはひっくり返すとか。ほれだとか、あとはチャンバラごっこだとか。チャンバラごっこ辺りになつてくると何人か必要で。当時小学校の低学年だとするとやっぱり高学年の連中がいて、

まあ彼らの後くっついて走り回ってみたいな。せいぜいそんなもんでしたね。ですからテレビゲームなんてもちろんないからね。

Q：例えば貸本屋さんとか漫画とかはどうですか。

佐藤：当時はほとんど読んでない、見てない。貸本屋ってのは。あったとは思いますが、ほとんど接してないです。

Q：買ってもらったテレビでは、テレビではどういう番組を見られましたか。

佐藤：テレビのときはね、当時は「快傑ハリマオ」だとか「ナショナルキッド」だとか、今はね、覚えているのは。赤頭巾、赤頭巾みたいな何だべ、何だか頭巾とか、そういう一種の活劇みたいなものが好きでした。

北海道はテレビ局が3局かな。NHKと、民法は下手すると1局とか多くて2局ぐらいしかない。ですんで、番組そのものをチョイスするのは、まあほとんどできないぐらいの感じですよ。東京出てきたらほんとびっくりしましたが、まあいっぱいテレビ局のあれが、チャンネルがあるよと。ですから昔はほんとに1、3、あとなにがしかぐらいのチャンネル、まあガチャン、ガチャン、ガチャンでしたけど、それっくらいで済んだ。ですから遊びそのものというのは、さっき申し上げたようなそういった遊びが主で。じゃあ本読みましたかったら、もうほとんど本読んでない。

私がほんとに小説とか、小説を読むとかなったのは、東京出てきてからですね。それこそ高校へ入る寸前ごろから、まあ俗に言われる名作だ何だかんだってのは、数は読みました。でも全部忘れたけどね、読んだ後で。ですからその前というとはほとんど読んでないね。

Q：例えば漫画でも手塚治虫とかが、ちょうどお生まれになった頃ぐらいに「鉄腕アトム」とか。

佐藤：私が記憶してるのは、「少年ジャンプ」じゃないな、「マガジン」、「サンデー」、これが小学校の4～5年生かな、うん。でね、「サンデー」が…そうそうそう、「マガジン」だったか「サンデー」だったかが創刊された。それは記憶してます、創刊されたときに買ったという。しばらくして「少年チャンピオン」かな、それか何かが創刊されて、その後にジャンプか何かが出てきてみたいな。

Q：「サンデー」は、1959年創刊のようですね。

佐藤：ああ、じゃ9歳。ああ、その頃かもしれない。それは確か芦別にその頃いたと思っ

ますけど、うん、そこで購入したという記憶あります。それこそ親に無心して、買ってくれ、みたいなことで、それで買ってくれた。

Q：勉強はどうでしたか、小学生のときは。

佐藤：あのね、私は出来は悪いほうです、もう正直言って。ただね、褒められると頑張るたちなんです。だもんで女性の先生、これはその辺うまいんでしょうね。でね、小学校の、今でも記憶してんだけど1年生かな、1年生は野花南、ん、島ノ下か、島ノ下の所で小学校1年生で入学して。当然田舎ですから児童数が少ないんで、当時でもね。ほれで1年2年が一緒、3年4年が一緒、5年6年が一緒みたいな、3クラスぐらいで。ほれで先生が1人で、ほれで2年生のこと教えてる間われわれ1年生はちょっと自習して、で、こちらにまた自習させて今度年生を教える、みたいな。

そのときに教えてくれた先生ってのが、担任の先生ってのが、今でも名前覚えてますけど、顔はすっかり忘れてますけど、シモムラ先生という女の先生で。この先生がやっぱり上手に私を褒めてみたいなことで、結構頑張って勉強して。で、得意科目は何ですかったら算数だなんてね。当時よく言えたなと思うんだけど、算数が、うん。そういうのでこう、ま、そこそこだったのかな。

ほれで学芸会か何だかんだのときに、本を朗読さして、上手なうちの1人に入って、それで学芸会で何の役だったか忘れましたが、何かのまあそれなりの役で、役、ただ立っただけじゃない役。でも児童数少ないから、あれでちょっと学芸会で主役もどきっていうのかな、それやっくらいで。まあそれなりだったと思います、1年生、2年生ぐらいは。

ところが、さっきも言っただように転校するでしょう。そうするともちろん、いやもちろん使ってる教科書も違ったり、それからもう進捗度合いも違ったり。最初から先生なんか褒めてくれないみたいなことで、ほれで成績が落ちる。いわんや男の先生だと、まあならんわね、褒めてどうたらこうたらなんていうのは、そういうセンスないから、いうことで。

そうすると、褒められないと全然駄目になってましたから。そうすつと成績が上がらなくなってきましたみたいな。ほれで、4年生ぐらいのときかな、うん、また女の先生になって。それは芦別っていう所ですけど、戻って。その先生がまた上手に褒めてくれて。一生懸命勉強する。しばらくして母が言ってましたけど、このノート、今で言うとCAMMPUSのあのノート、あれを数日でやっぱりこういっぱい勉強して、どんどんどん、何ちゅうんですか、使ってた。それくらい勉強はしたんで、そこそこ良かったと思います。ところがまた転校して、そこまた男の先生になって、みたいなことなるとまた駄目になって、いうことで、成績は良かったですかつたら、悪かったでしょうね、多分。トータルすると。

ただ、おふくろはあるとき言っただんですけども、何かのときに私がまだほんとにちっ

ちやい頃、誰かあの、まあ八卦師っていうか占い師に姓名判断だかどうだか分かんないんですけど、こう見てもらったと。そうしたところ、この子は大器晩成ねと（笑）、言われたらしいんだわ。だもんだから、母からしてみると、おまえ、今は全然駄目でね、これでも、もしかしたらあの占いが当たってゆくゆく（笑）、良くなるんじゃないかって。そう言われたんだからねっ、てなことでも私に発奮を促してたな、みたいなことあったようですけど。

Q：ご兄弟との関係はどうか。よく遊んだとか。

佐藤：そうですね、まあ妹とは4歳。私が昭和でいくと25年生まれ、1950年。妹が29年、それで弟が30年。まあちょっと年子に近いんですけども、まあちょっと離れてるんでね。それなりに一緒に遊んだというよりは、面倒を見たという思いのほうがやっぱりちょっと強いですね。

それで、まあうちはほんと貧乏だったんで、母もやっぱ働きに出る。そうすると家には3人いて、3人で飯の支度から掃除からやらなくちゃいけない。そうすると、じゃあ例えの話、茶わん洗いとか誰の仕事、掃除は誰、米研ぐのは誰、掃除する、要するに部屋の掃除は誰みたいなこと。まあそれなりに分担して、私もやるし妹弟にもやらせるんですけど、しょせんまだ妹弟ってのは私と4つ5つ違うんで、いきおい全部、ある意味じゃこっちでできちゃう。まあその、めんどくせえなっていうね、やっぱり思いはすごくありましたよね。でもやらなきゃしょうがないからつつて。一番嫌だったのはやっぱ茶わん洗いだね。あれは嫌だったね。嫌だろうがしょうがない、みんなで飯食った後洗わなくちゃしょうがないと。皿にしろ茶わんにしろ大した数はないんだわ。おかずが全部ばーっと出るなんていうのはない話ですから。

まあ今じゃでもほんとぜいたくかも分からないですけど、よく食卓に出てきたのがクジラです。クジラのこのブロックなあって、それが今でかっこよく言うとパーシャル。半分凍ってるような感じで、これをシャンシャンシャンシャンと。それを一種刺し身にして、ほいでしょうゆ付けて食べる。当時はもう、またクジラかよ、ぐらいな話でね。

一同：（笑）

佐藤：まあ今食べると多分おいしいんだと思うけど。それが、まあパーシャルの状態ですから半分凍ってるぐらいの状態。徐々にこう解けてくるんです。そうすると血がじわーっと下のほうにこうたまってくる、というような。それが1個あって、あとみそ汁があってぐらいの、まあ大したほんとに食べ物じゃなかったですよ。

肉なんて、ほんと口に入るのはまあクジラ以外でいくと、まずめったにない。あるとき、これ、幾つときか忘れたけど、母に、何か牛肉ってのがあらしいと。だから一回、牛肉ちょっと食わしてくれと言ったことあったらね、秀樹ねと、あれは乳臭くて駄目だと。

あんなのは全然ねと。実際あるとき食べてみたら乳臭くどころか全然おいしいわけよね。

だから当時ちょこっと何かあると、いいとこジンギスカン。ほれで、そっからしばらくしてからかな、肉鍋っていう。その、すき焼きもどきです。肉鍋とって、うちでも肉鍋っちってんですけど、それは豚肉入れるんです。だから牛肉の代わりに豚肉入れて、しょうゆ味で煮て、みたいなの。それがまあ年に何回かあるくらいかな。

中学校入るか入らないかぐらいのときに、今ではもう売ってないでしょうけど、インスタントのスパゲティナポリタン。あれ、お湯か何かであっためんだったか、もしくはまあちょっと生んかって、それをフライパンでこう炒めるのか、ちょっと忘れちゃったけど、それ食べたときに感激しましたね。何にも具なんかほとんど入ってないだもん。ただそのケチャップ味で、そば・うどんじゃないヌードルでということで、いや、こんなおいしいもんがあんのかくらいの感激でした。

だから、こと食生活においてはまあひどいもんで。北海道だと、とかくその、海産物含めておいしいものがいっぱいあるでしょう、みたいなこと言われるんですけども。空知郡ってのはまあ北海道のど真ん中ぐらいにあって。そうすると、冷蔵庫なるものが当時はほとんどないんです。ですから、ものをこう、例えば魚を運んできたとする、もうそのときに食べちゃわなきゃ駄目だ。運ぶにしたって物流が当時はもうほんとに汽車ぐらいしかない、ということなんで。物流があんまり良くないから、しょせん生物ってのは、さっき言ったパーシャルする、もう冷凍されてるようなものみたいな、そんなもんなんで。海産物はもうほとんどおいしいものなんて食ったためしがないね。

今でも覚えてますけど、その、あれは島ノ下っていう確か所だったんですけど、店が 2 件ぐらいしかないんだわ。そのうちの 1 件、家の近くにあって。そこはまあいろんな食料品が置いてあって、ですけど冷蔵庫はない。でも、ふたを、ぼんって開けて、そこに一種の、何ていうかな、油揚げとか練り物があって。たまにちょっとクジラ以外、まあ練り物、そういうもの食べようっていうこと。おふくろが買ってきて、まあ焼いてましたと。そうするとね、いや、あんどきもびっくりしましたが、うじが。はい、熱いもんだから出てくるわけ。それくらい、要するに衛生という観点でいくと、もう全然駄目な。まあうじっていうの、これは昔はもう全部トイレは水洗じゃなくてため込みね。

Q：くみ取り式ですね。

佐藤：そうね、くみ取り式。そうすつと目の前っていうか、まあ用を足した後ちらっと見ると、まあうじがいっぱい湧いている。だからまあ、うんこんどこにいるようなそんなものが、食い物を焼いたら出てきた。あれはちょっと、がくぜんとしましたよね。

だけでも、まあ今考えると、そりゃそうだろうなと。冷蔵庫に入れてるわけでもない、ちょっとしたふた、ハエがブンブン飛んでる。当時はハエ取りつつたらあのぼんぼりで。あそこにめっちゃくちやくつつくんだよね、もうすんごいよ、うん。そういう状態の中

で、食いもん、食べもん、これの衛生なんてのはもうどうしようもない。まあそういうのみんなやっぱり、われわれの年代は経験してきたからね、これ。

ただ、島の下って所は、今考えるとほんとに美しいイメージしかないんだけど。後ろに川が流れてて。それ、小川、小川っていうかな、結構それなりに当時は水量も多くて、それが空知川に注いでいるというそういった川で、非常に水もきれいで。そこで水遊びみたいな。それで、そんなに深い川じゃないんで。せいぜい膝上ぐらいで。

そこにはカジカだのドジョウだのがいっぱいいて、カジカを釣るっていうか。カジカというのは頭でつかけて口がでかい、ほんとちっちゃな魚なんですけど。これ、ばかだから、餌に食らい付いたら離さないんだわ。ほんでひゅっと上がってくるとそのまま上がってくるという。じゃ餌何ですかったらミミズです。近くに養豚している人がいて、餌、これ何だろうな、何か米ぬかなのか分かんないんですけど、それをちょっと置いてある。そこをちょっと掘ると、まあミミズがわんさかわんさか、それはいっぱい出てくる。そのミミズを針と糸でこう頭から、もうけつかどっちだか分かんないんだけど、ひもに、糸に。ほれでぐにゅぐにゅ、こうやっていっぱい。もうそれこそ何十匹。それでこうやってだんごにするんです、ミミズを。で、ひもを垂らして、こうやってカジカのところへ置くと、カジカだっでご相伴っていうことでわっと来てばくっと食い付く。ほれでそのままひゅっと上げたらね、カジカさんも上がってきて、こちらのとこへこう置いてみたいなど。それを食ったのったら、全然食べてない。しばらくするとやっぱり魚だもん、死んじゃう。それまたぼんとぶん投げて。ドジョウはなかなか捕れないんだよな、みたいな。ほいでいかに広いほうへ誘導するか。

Q：分かります。ミミズを使うと、よく釣れるんですね、

佐藤：きれいとはいへど、やっぱり流れてますからよく見えない。だからガラスの破片、こういうのをこうやってあてがうと、そこへ水流がこう、水が。だから一種のゴーグルなんてあんなものないですから、水中眼鏡なんかないから。ガラスの板をこうやってあてがいながら、こうやって見るとそこに、ああ、カジカだ、ドジョウだ。そこへこうやって下ろすと、カジカはばくっと来て、みたいな。そういう形で魚釣りっていうんかな、そういうのやりましたけど。さっき言ったように、それを捕ってどうすんのつつたらどうもしない。ただ釣って、ほいで捨てちゃうという、非常にまあ残酷といえば残酷なことやりましたよね。だからその、後ろにすごいきれいな川が、水のきれいな川が流れていて。

実は会社へ入って10年ぐらいしてからかな。うん、リクルートで北海道へ学生を募集に行こうと。当時セガっていうのはもうほとんど知られてない、というような会社で、ほいでいくら募集したって、まあほとんど来ないんです。だからこちらが会社説明会です何だかんだっていうことで、北海道の札幌で説明会やりますということで。これも会社のあれで持ち回りの、ちょうど私が順番なるときは夏休みぐらいだったんで。夏休み。まあ女房

と、じゃあ夏休みの旅行がてら行ってみよう。

で、行ったついでにさっき行ったその島の下っていう、きれいな川が流れて。ほれで女房にちょっと見せてやろうぐらいのことで行ったんです。ほしたら何と川はもう干上がっていて、どぶ川なってるしね。あれはやっぱりね。イメージだけで、記憶だけに残しといたほうがいいな、みたい。それくらい、あの、きれいな所でした。

まあ、あれですよ、何か、何を私は悪さしたんだかどうだか分かんないんですけど、母がすごい怒って、おまえなんか要らないって言って。それで川にちょっと、何ていうか、谷みたいになって、少し段差があるんですかね、その上ん所に家があつて。おまえなんか要らない、みたい。なことをね。ほれで引っ張られてって、ほれで、おまえなんか川に捨てちゃうからねって（笑）、ずるずる引っ張られて。ほいで、そこに落とすふりをするんですけど。ああいった崖んところってのは、意外とブドウだったり何だり、つるがね、いっぱい横に走り回ってるんですよ。だもんだから、私はこう首根っこつかまえられて、ね、さあ落とすぞ、落とすぞ。だけどこっちはつるにもう足掛かっているからね（笑）、ほぼ落ちない。

一同：（笑）

佐藤：たぐって、たぐってね、引っ張るわけですよ、もう。中途半端に首根っこ押さえられてるよりは、つるにしっかりと足付けたほうがいい。そうしたら今度はおふくろがかなり焦って、やっぱり。後で話したんだけど、あのときは俺も足、つるに引っ掛かしたから全然大丈夫だったんだみたい（笑）、いうことだけど、まあそういう思い出ってのが、その田舎がゆえにありました。

ただし、あれがないんです、内風呂は全然なかった。だもんで、島ノ下っていう所では、何か近場にやっぱ温泉があつたんですよ。今でもあるかどうか分かんないんですけど。歩いて30分くらいかな。そこへ週に当時1回ぐらいじゃないの、風呂入ってたのは。そこへ入浴しに行く。その道すがら畑がいっぱいあって、いうことで。ほれでほとんど大したもの食ってねえから、今考えるとよくあんなことやったなって思うんだけど、大根畑があつて、そっから大根引っこ抜いてみて。ほんで青いところは、意外と甘い部分もあるんですよ。それを、皮を歯でこそぎ落として、大根かじりながらそこへ行つてとかね。

### 幼少期：性格

Q：今から振り返ると、当時の、小学生の当時のご自身の性格、どういうふうな性格の子どもだったと思われますか。

佐藤：だから褒められて伸びてる最中は、すごくある意味じゃ活発っていうかうるさい。先生に通知表によく書かれてたらしい、落ち着きがないとか。何か号令係みたいなこともやらされて、それで起立、礼みたいなことだとか。ほれで、まあそれなりに野花南以外は

まあちょうどあの団塊の世代から少し下りたところなので、まだまだ児童数が多い。1クラスもそれこそ50名ぐらいいるぐらいの所で、まあほんとに机がだ一つとあって。

そうすつともう、横のやつとべちゃべちゃしゃべったり、後ろ向いたりとかね。ああでもないこうでもない、ぎゃーぎゃー言っていたらしい。それは、自分がやっぱ伸び伸びとしている、環境の中ではね。それはさっきから申し上げてるように、はい転校しました、最初のうちやっぱあれだよ、慣れてないからおとなしくせざるを得ないっていうか、まあおとなしい。本質的には私、おとなしいほうだと思います。非常にこう内気で、何ていうかな、人見知りでみたいなことだと思うんですけど、何かこう認めてくれたりなんかすると頭に乗って。北海道で「おだつ」って言うんですよ。はしゃぐみたいな、調子づくみたいな。またおだつて、みたいなね。よくそういうことを言われた。

ただ、転校を何回も繰り返していると、だんだん性格もひねれてくるんだね、きっと。だんだん、こう真っすぐしてたのがさ、いったんこうね、休んだり、こっちは曲がって、で、またここで。で、せっかく慣れてきたらまたこっち。性格がねじれてくるっていうか。

Q：すると、北海道の町とか、じゃあお店がもう全然少なかった。

佐藤：うん。

Q：例えば、他の方の聞き取りをやっていると、都市、都内にいた人だと何か駄菓子屋とかそういうこう、地域、ある一種の子どものコミュニティっていうかこう、たまり場みたいな所があったりとかするんですけど、やはり北海道だと駄菓子屋みたいなのもそんなに多くはないと。

佐藤：あのね、駄菓子屋、うん、そうだね、駄菓子屋だし乾物屋だし。北海道の芦別って所は、当時は人口がそれでも4万、5万人ぐらいいたのかな。おつきな町じゃないですけど。そこでさっき言ったテレビを見に行くっていうんで。とある商店、名前は忘れちゃったけど、そこへ行くとやっぱ友達連中がいるわけです。特に日曜日辺りになると、さっき言った「ナショナルキッド」が何時からみたいな。そういうところで、やっぱりみんな集まってるんですよ。だからそこ行って、まあ真剣にそのテレビ見て、で、ある時間したら、それでうわっと引きあげて、それで何か遊ぶ。遊ぶって何やって遊んだかがよく分かんないけど、まあそういう点でいくと、そのお店が一種のコミュニティ。それは何も同学年だけじゃなくって、もうそれこそ小学校であれば高学年も一緒にいて、みたいな。

### 幼少期：外での遊び

Q：どちらかというと、じゃあおうちで遊ぶっていうことが多かったんですか、友達の家で。例えば外で虫捕りですとかって自然と触れながらするっていうことは？

佐藤：そうね、虫捕りっていうのは記憶あるのは、トンボ捕るというのが、まあ北海道、ご存じかどうか分かんないんですけど、もうそれこそ 8 月くらいから、まあ半端じゃないですから、トンボの数が。ほいで、じゃあトンボ捕るのに普通だったら網。でも網なんてないわけです、買ってもらえない。

ということで、じゃあどうやって捕るのっていったら、もちろんぱっと手で捕る。それはそれでやりますけど、もっとう例えばオニヤンマみたいなでっかいの捕ろうとかそうしたときに、網がないからどうすんのかつつたら、クモの巣。あのね、針金をこう丸くして、そいで棒の先にその針金付けて。こう丸いでしょ。で、クモの巣をぺっとうそこに張り付けんですよ。ほれで、まあもちろん 1 枚じゃ弱いんで。クモも当時いっぱいいたしクモの巣もいっぱい張ってたから、それをぼんぼんぼんぼんと張り付けて、まあ 5~6 枚かな、張り付けると結構しっかりした網になって。で、もとよりクモの巣だからくつつく。そういうのでトンボを、それをぺっとうやると、そこにトンボの羽がびたっとくつついて。ということでトンボ捕ったりとかね。

トンボもほんと、普通アカトンボみたいな、ああいうのはやっぱり捕っても面白くない。だからシオカラトンボ。シオカラっていうのは銀色したトンボです。やっぱり一番捕りたかったのはオニヤンマっていうあれだね。あれはでかくて。ところがあんなのめったに捕れやしない。私、トンボを食ったことがあるんだよ。今、よく食ったなって。あのね、頭取って尻尾取って、足むしって羽もむしって、あれで食ってみたけど、うまくなえなど。あとハチ。ハチもとっ捕まえて、とげ取って、それでまあ食ってみて。何かね、甘いんだよね、ちょっと。そういう

Q：：ハチノコじゃなくてハチですか？

佐藤：ハチそのもの。今考えたらね、何食ってるか分かんないものを食って。当時おやつっていうと、1 斗缶に、何ちゅうんだろ。よく言やクッキー。A、B、C だとか 1、2、3 だとか文字になったクッキー。それが年に 1 回ぐらいかな、何かでもらえるんです。もらえるっていうか買ってくるんだらうけど。それを 5~6 個がまあ、1 日のおやつみたいな。決して甘いわけでもないし。で、またちょっと……。

Q：塩味のクラッカーみたいな。

佐藤：塩味の、まあよく言やクラッカーねっていうぐらいでしょうけど。小学校ぐらいでよく食べたのは、近くにせんべい屋さんがあって、塩せんべい。あれ作るときにぷちゅっところ、まあ機械でもちろんやるんでしょうけど、ぷちゅっ、ぷちゅっぷちゅっを入れて、それでぎゅっとう上下で押しつぶして焼く。そのときにあふれ出てき、耳が出るわけだね、

せんべいの耳ってやつ。それはぷっくりしてたり、それから平べったかったり。

でね、もちろんそんなものくっついた状態では、工場は出せないから、耳を落とすわけです。落とした耳どうするのったら、われわれが買いに行くんです。1袋、それこそ結構入る、それが1袋5円とか。5円あったらそのせんべいの耳、これが食える、いうことだね。あのせんべいの耳、うまかったよ。私、今でも塩せんべい好きだけど、あの耳の部分っていうのはまた、うん。で、めっちゃくちゃに安いんでね。

Q：パン屋さんでパンの耳買うぐらいの感覚で。

佐藤：そうそう、うん、それに近いと思うわ。まあパンもあれよ、私はどっちかといったらやっぱりその耳付きっていうかな、横もこう、こう切ったものの中じゃなくて両サイドが好きなんだけど、なかなかね、普通のパン屋に行ったらみんな耳落としてるでしょ。少し菌応えがあって、みたいなやつ。だから女房が近場に何か買いに行く、スーパーじゃないパン屋へ。ほれで私も耳が好きだっていうんで、何回か買いに行ってるうちに、佐藤さんは耳付きがいいんだってことで。言っとくとちゃんと耳付きで置いといてくれるみたい。だから5円もあればほんとすごいっぱい来て、それをばくばく食いながらみたいな。ですからトンボ食うよりはやっぱりうまかったよね（笑）。

Q：はい。トンボよりは…。

佐藤：あれは、あっちではほら、ゴキブリっていうのはいないんだわ。

Q：北海道は寒いからいないんですね。

佐藤：ほんと私がほんと東京へ来て、最初は昆虫だと思ってたからね。北海道ではクワガタ、もちろんバッタだとかその辺の昆虫っていうのは、それこそいっぱいいて。それでさっき話した女房連れて島ノ下行ったときに、女房はもうすくんじゃって動けない。何でかと思ったらトンボが半端じゃない、ブンブン飛んでる、はいバッタが飛び跳ねてる。もう二度と行きたくないってね、それくらいにやっぱりいっぱいいて。

だから、ゴキブリ最初に見たときに、私は普通の昆虫くらいのイメージで見てたんだけど、後で聞いたら、いや、あれゴキブリという代物で不潔極まりないようなことで。だから昆虫を、こう触るっていうこと自体はほとんど抵抗ないからね、その点では。

あと、よく言われるんだけど、北海道で育ったんだからスキーはもうそれこそ日常茶飯事で、もちろん冬の期間ですけど、で、かつ上手なんでしょうね、みたいなこと言われるんですけど。確かにスキーはやりましたよ、やったけど、そんな日常茶飯事的に毎日毎日スキーなんかに乗ってるかつつたら、そんなの乗れやしない。雪はもう厄介なもの以外

の何物でもない。だから年にそれこそ、そうですね、シーズン中にまあ 5 回ぐらいスキーに乗るぐらいなもので、あとは乗らん。けどまあ慣れてはいるんですよ、その、スキーっていうかな、その頃にね。

だけど、これもちょっと後の話なりますけど、はい東京へ出てきました、会社へ入りました、みんなでスキー行こうよっつって行きました。まず、道具が違う。昔はばねの、カンダハーっつって昔言っていましたけど、引っ掛けてバッチンとやって、それでスキー靴。スキー靴もせいぜいくるぶしぐらいの所まで、かかとのほうからこうワイヤーのばねのやつを回して、前のほうでバチンと留めるっていう。その手のものにずっと乗ってて。ほいでこっち来ました、スキー靴は何？ ね、膝下それこそ高い所まである。足首が動かない？ 昔はエッジを立てるったらどっちかって足首でコントロールしてたぐらいな。

で、ゴムだったんです。スキー靴ったらゴム靴、ゴムで。もちろん留めるために、しっかり留められるように、ひもを結わせる所はありましたけど。まあまあパチンパチンってやったら、もうそれで足入れたら足首が動かない。足首動かないとエッジが立てられない。いや、当時だから足首でこうやってどっちかっつうとコントロールしてた、というのが。

ほれでね、だからスキー行きました。それでももちろんレンタルで借りて、さあ乗りましたって。いや、真っすぐしかもう。これ、すごい怖かったよね、全然コントロールできないし。ほれで、まあでもやっぱり雪そのものを慣れてるせいかな、少ししたら、ああそうかと、エッジを立てるにはこうするのかああするのかっていうことで。靴が全然違ってたにしろ、スキーそのものの構造が違ってたにしろ、何とかできたんで。まあそういう点では北海道にいて、それなりにやっぱり雪に対してなじみが深くて良かったんだろうなという。けどまあスキーなんかもう、東京来てからだってせいぜい 5 回ぐらいしか行っていないんじゃないのかな、若い頃含めて。あんまり乗りたいとも思わないです（笑）。

## 幼少期：おもちゃ

Q：子どもの頃、最初にもらった玩具っていうのは何かありますか。覚えてらっしゃいますか。

佐藤：最初の玩具？

Q：：まあ、あるいはよく遊んでいた玩具ですね、いわゆる子どもが遊ぶために作られた。

佐藤：おもちゃ、まあ貧乏だったからね、ほんと、あんまり買ってもらってないんだけど。いつからの時点から、私、プラモデルが好きで。そいで特に戦車。だから多分少し年齢があればだろうな、まあもちろん北海道の時代です。だから中学校の 1 年生くらいかな。2 年生、1 年生のときもうこっち来ちゃってるから、うん。あのね、今だからゲロするけど、私、万引きしたことあるんだわ。それは、当方で 2500～2600 円するプラモデルのあれじゃないか

な、戦車。当時の2500~2600円だから大変なもんですよ。当時、父がボーナス出たっつって大喜びで。みんなで中華料理屋行って、ほれで食べた記憶がうっすらぼんやりあるんですけど、そのボーナスが1万円。うん、1万円、ね。1万円出たら、よし、みんなでっていうみたい。だからそっからいくと、2500~2600円、3000円ぐらいしたと思います。

ほれこそでっかい60センチぐらいの箱。60センチ・30センチぐらいの箱に入ってる。タイガー戦車ですよ、タイガーのね。でね、それでももちろんモーター付いて電池使って。でね、何でかっつたら、そのプラモデルも売っている店が改装かな。何か掃除か何かしていて、商品が外へ出てたの。ね。だから、どうぞ持ってってくださいと。いうことなのかどうか分かんないけど、これなんでね。いや、やっぱ随分欲しかったんだろうな。それをね、よく捕まんなかったって今も不思議だけど。でっかいんだよ。

Q：でかいですよ。

佐藤：取って、走って逃げたんだろうな。で、家帰ってきて、ほれでもうほんとはむしやらにこう、やっぱ組み立てたね。セメダインでこうくっつけたり何したりかにしたり。まあ、あとよくやるのはあれだよ、かっぱらいといえはほら、あの何だ、あれ、何を取ってきたのかな、要するに農作物で。何かがあって、何かをみんなで取りに、まあかっぱらいに行き、で、ポケットにいっぱい入れて。それで何かね、見つけたんだよ。

ほれで追っ掛けられる。そのときに、何であんなことする必要あったのかなと思うけど、ポケットに入ってるやつを、まあ罪滅ぼしなのかほんとに分かんないんだけど、みんなこう捨ててそれで逃げる。だから、どうせ逃げんだったら、ね、ポケットに入ったまんま逃げて、後で楽しみやいいものを、何かこう捨てて逃げる。そういうのはよくやったね。ろくでもないけど。

あとあれですよ、クワの実。クワはほら、季節になると紫色の実っこを付けるんです。クワの実、クワの実っつってね。これは食べるとやっぱ甘酸っぱくておいしいんです。中はほんと、非常にジューシー。びゅっと採ったら、ややもするとつぶれる。そうすると紫色の汁がべたっとくっつく。それをばくばく採りながら食べてくっついていう。それはもうほんとある期間。ほんで、しよせん木の上ですから、木から落っこって背中を打ってウーッつって。よくあれで死ななかつたなって感じ。まあ、死ななかつたんだからまあええのかなぐらい。

だから、ちゃんとしたものがおやつにはならないんで。食べられるとしたら、そんなもの食べない。でも何もない、そうすつと何か食べる。あと野イチゴだとかそういうのを探して食べたりとか。そういうので、うん、甘みを取ってたんでないかな。

まあちょっと話それちゃうか分かんないけど、昔は、もう価値観の話ですけど、栄養のあるもの、甘いもの、これは高級なものだったのです。砂糖の消費量が文明のバロメーターだ、みたいなこともいわれて。だから甘いものを口にするというのは、やっぱりそれな

りに生活水準が上がってこないと手に入らない、食べられないもんだっただけけれど。

ところが今やカロリーが高い……昔は高カロリーのものは高級なもの。今は高カロリーのものゝ駄目、みたいなね。だから甘いもの取り過ぎると良くない。だから、あるところを境にして、食べ物そのものは是々非々、この辺がもうがらっとこう変わってきて。だからドライカレーみたいなのちょっと低カロリーのもののほうが、ややもすると高いとか、人気があるとか。で、今、野菜がどうだこうだっつつるけど、昔は野菜、菜っ葉しかないみたいなの。

だから今考えると、おふくろも大したもんだなと思うのは、漬物を自分で漬けるそのときに、大根をまあトラックで買って、ほれで洗って、縄で縛ってしばらく干すんです。あれ、何百本ぐらいあったのかな。それを干して、漬物樽にそれを入れて、それで塩を振って何やってかにやって重しやって、はい次は白菜だって、白菜の漬物。漬物はもうほんとご飯のおかずでしたから。ほんでナスだとかね、あれ、毎年毎年莫大な量を漬物にしてたね。だって樽だけで、あれ、30樽超えてんじゃないかな。

Q：そんなにたくさん漬けてたですか。

佐藤：まあ樽って、そんなにおっきなものじゃないですよ。

Q：台所に置いておくようなぬか床ですよ。

佐藤：うん。あとね、あと、父はもちを1人で、あれ何斗ついてるんだろうな。何升、何十升とついてんじゃないかな。もちも冬の間のまあ、ある意味じゃ食料になるんで。あれでもう、どんどん蒸しちやあ、母がこうやって返しながら、それで父はきねでついている。延々とやってたからね。あの体力たるやね。

Q：たいへんそうですね。

佐藤：今考えると、まあ私ももう年だからああいうことできないけど、当時で父親はあれ40……。まだ小学校ぐらいだから、そうだね。それにしてもあれだけの量を1人でついていたのはね。もちも多分白もちだけじゃなくって。ヨモギを入れたよもぎもちだとか、あと豆もちだとか、何かエトセトラ。いろんな種類を作って、それで冬の間それを食べながら、まあ一種のおやつ代わりみたいな形でやってたから。いや、その辺では、まあてえしたもんだなと、うん。

父は大正13年生まれで、60……。あ、違う違う、76で亡くなったんかな。母が昭和2年生まれで68で亡くなった、ということで。私はだから72で死ぬんかなという。足して2で割って、遺伝子が半々と来てればね。だから、ああ、あと5年かっていうぐらいなね。

だから、あとその、ね、本来はこういうおもちゃをとっかかりにしてゲームのこういうことにつながってなんていう、そういう話ができりゃいいんだろうけど。まあプラモデルはやりました。まあちっちゃいやつで、キャタピラがゴムでできてますとか。それはそんなに値段がしなかったんで、それはちゃんと買ってたんでねえかな。買ってもらったと思うんだけど。二千何百円、3000 円のやつはちょっと失敬してきて。だってそこに置いてあるから持ってってくださいっていうことだから、まあ廃品回収をしてきたという（笑）。

そのときに思ったのは、あのタイガー戦車ぐらいなると電池がすぐなくなる。ということで、何とかならんかなと、調べた記憶があるわ。ほしたらね、蓄電器という。要はコンデンサーのことです。蓄電器なるものがあると。それがあると電気がためられるみたいなのがあって。ほれでじゃあ蓄電器があればタイガー戦車が動くか、いうことでいろいろと調べた記憶はある。それとあと変圧器、トランスっていうやつがある。トランスがあれば電圧を落として電力が供給できるっていう。トランスなるものがあるんだという。調べたけど、そっから先どうしたか。そのトランスだけあってもしょうがないんだわ。その後ちゃんと整流して直流にしなくちゃしょうがないんだな。そこまでは、ガキの頭じゃ回らない。

### 幼少期：両親からの小遣い

Q：じゃあちょっと、じゃあ休憩の前、ちょっと1つだけ質問いいですか。

佐藤：はい。

Q：ご両親からお小遣いとかと、月にももらえるようになったのはいつぐらいからとか、金額って大体どのぐらいだったのかっていう。

佐藤：あのね、毎月幾らっていう形ではもらった記憶はないんだわ。反対にね、召し上げられてた。何かで、例えば正月、おじさん、おばさんからなにがしかをもらう。そうすると、じゃあ預かっというてやるって。

Q：親がお年玉をそのまま預かっちゃうんですか。

佐藤：で、必要に応じてその時々、まあ何買ってくれつつって。まあしょうがないなっていうのか。あとおやじが勤めている所に行って、いや、ちょっと映画見たいから金くれと。当時映画が、子どもが30円かな40円かな、何かそんなぐらいだったんで。まあ芦別って所ですけど、芦別に映画館があって、そこへその30円か40円もらって映画見に行つてという。そのときの何となく記憶だけど「史上最大の作戦」とか、何かそういうふうな映画だろうけど、見たような記憶あるけど。毎月幾ら、毎月幾らみたいなことは一切ない。

じゃあ、クリスマスにうちで何やるのったら、ケーキが 1 個ぽんと乗る。それは年に 1 回ですよ、ケーキ食べられるの。それを切って、ほれで、まあ何等分したのか、どういうふうな分け方したかがね。いやあ、あれはおいしかったっていうかね、楽しみでしたね。

Q：お誕生日のときに、お小遣いもらったりとかプレゼントされたりとか、そういうのも特になかったんですか。

佐藤：誕生日は……誕生日はほとんど何もなかったんじゃないかな、うん。まあ金がなかったね、ほんと。ま、大体そんなんでないのかな、みんな、あの当時の。

Q：それがもうごくごく普通の庶民感覚という。

佐藤：うん、だと思うけどね。それもほら、北海道のど田舎。特に島ノ下っていうんだからな、まあ本当ね、推して知るべしですよ。人口何人いたんだ、1000 人いたんかな、いないのかなってぐらいな。近場で豚飼ってるわ、ねえ。そんな所で、店は 2 件しかありません。

記憶にあるのは、昭和天皇だろうと思うけど、一種お召し列車ね、通って。それで天皇陛下が、富良野という町があるんですけど、富良野はちょっとおつきいんですよ。島ノ下っていうのは富良野市字、大字なにかし字なにかしぐらいの、そんな感じの所なんですけど。天皇陛下のお召し列車が通るっていうんで、当時小学生だったと思いますけど、全員その島ノ下駅、そんなの止まりゃしないんです。そこを通過していただけですけど、そこへこう並んで。その後、富良野に着いたっていうんで。あれ、おやじかな、何か好奇心なんでしょうけど、よし、じゃあ富良野行こうみたいなことで行って。それこそすごい人でしたね、何か。みんなやっぱ天皇陛下がとあるホテルへ泊まるったら、そのホテルの周りどころ、みんな。出てきやしないよ、ただそうやって。何かイベントが何にもないから、そういったイベントあれば、みたいな。

Q：お召し列車ですか。SL の、機関車の先頭に日の丸が飾ってあるような。

佐藤：そうだと思うよ、うん、飾りがあったと思う、うん。当時、あの当方で学童、あの小学校で何人いたんだろうなあ。せいぜい 50～60 名じゃないのかな、いたとして。1 学年 10 名ぐらいの、うん。